

(4) 放牧管理

子牛の放牧にあたっては馴し放牧が必要であるといわれているが、著者らは2ヵ月齢余の子牛も含め約250頭を舎内育成から即日の昼夜放牧を行なったが、このことが原因となる事故は1頭もなく、放牧時間を除々に延長するなどの特別な馴し放牧の必要はないと考えられる。ただし、子牛房などの飼養から広い草地に放すと、見境もなく突走る危険性があるので、追房み房などで、運動させてから放牧する配慮が望ましい。

若齢放牧では放牧管理技術の良否、特に放牧強度が増体成績に大きな影響を及ぼすので注意しなければならない。第3表の若齢放牧試験で試験1と試験2の4ヵ月齢放牧群はおおむね同じ月齢と体重で放牧育成を行なったが、前者の日増体量0.58kgに対して後者は34%も劣る0.38kgの成績であった。これは後者を放牧したシーズンは草地面積に対して放牧頭数が多すぎ重放牧となった結果であり、その影響は極めて大きかった。

放牧にあたっては、放牧地を何牧区かに分けて輪換放牧を普通行なうが、春、夏生まれ子牛はそ

れぞれ12.0ヵ月齢、9.0ヵ月齢で放牧を始めるので放牧管理も特別な注意をしなくてもよいが、秋、冬生まれ子牛の放牧にあたっては、最良の草生状況にある牧区を使い、重放牧におちいらぬよう留意し、早目に次の牧区へ移すような放牧管理が要求される。

(5) 草地管理

牧草の生育は6月をピークとしてその後は減少するが、放牧牛の採食量は逆に春から秋にかけて増加する。したがって、春は草生量が採食量を上回って徒長し、秋は草量が不足して放牧牛に悪影響を及ぼすこととなる。春はスプリングフラッシュと称して牧草の生育が旺盛であるからそれを助長するような早春の施肥をひかえ、2,3回放牧後に肥料散布を行なうなどの肥培管理も必要である。また、秋季の草生不足に対してはASP(晩秋放牧用草)を活用すべきでこれは1~2回収穫後の採草地を施肥して8月頃から残しておき、10月頃から放牧に供する方法であり、良好な放牧成績が期待できる。

バラの植え方

雪もとけ、春が訪れいよいよバラの苗の植え込みの時期になって参りましたので、簡単に苗の植込みについて説明いたします。

1 植穴の準備

出来れば、植付けの20日前位に、直径30cm深さ30cmの穴を掘り、底にバケツ1杯位の堆肥を入れ表土と良く混合し土を充分落着させます。しかし間に合わない場合は、スコップで深さ20cm位の穴を掘り良く土を砕きます。なおこの際、化学肥料は使用せぬようにして下さい。また堆肥を入手出来ない場合は、市販の乾燥肥料を一握り位土と良く混合して下さい。

2 植込み

植込みの時は、根を充分拡げて植込みます。土は接目より少々深めにかけて手等で良く押さえた上、バケツで1杯の水を静かに根元にかけて土を落ち着かせて下さい。



なお植えた後は、支柱等を立てて風による動揺を防ぐ事も活着を良くする方法です。

なお植付ける前に苗を半日位水に浸けて吸水させる事と、植付後、枝を3/4位に切り詰めて下さい。また苗の植付後、根元に藁等を敷いて乾燥防止しますと活着も良くなります。

活着し芽がどんどん伸びて来ましたら株の周りに肥料を施して下さい。